

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 85 号 平成 29 年 3 月 20 日
編集・発行 神戸市立中央図書館
〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



日本真珠会館（中央区東町）

真珠の街 神戸

「パールストリート」。神戸北野に真珠業者が多数集まってきたことからそう呼ばれるようになりました。明治二十六年、御木本幸吉が伊勢で半円真珠の養殖に成功してから研究が重ねられ、明治四十年には真円真珠の養殖に西川藤吉・貝瀬辰平・御木本幸吉が成功します。日本は世界の養殖真珠の一大生産地となり、養殖場は伊勢志摩から四国・九州へと広がっていきました。

産み出された真珠は各地から神戸へと集まってきました。産地から行き来しやすく、国際的な貿易港があり、外国の商館が多くて取引に便利であったためです。そして六甲山を背に、真珠の選別に適した柔らかな北光線を安定して得られるということで、北野界限に真珠の加工業者も集まってきたのです。

東遊園地近くの日本真珠会館に神戸パールミュージアムがあります。また、『神戸真珠物語』（ジュンク堂書店）には、真珠に携わったさまざまな人の思いやエピソードが紹介されています。

真珠は神戸の港を中継地として、世界へと運ばれていきます。

KOBE・三宮物語—三宮復興の軌跡と明日への飛翔—(『KOBE・三宮物語』編纂委員会)

本書は、敗戦の翌年に誕生した三宮センター街の七十周年の節目に、地元関係者で結成する「KOBEBE三宮・ひと街創り協議会」により刊行された。

戦後の焼け跡から復興した三宮が、地下街の完成やポトピア⁸¹開催といった輝かしい時代を経て、震災からの再建など、幾度も困難を乗り越えてきた軌跡が豊富な写真とともに記されている。

最終章では、協議会メンバーである「街衆」らによる近年の取組みや、神戸市が計画する「再整備基本構想」にも触れ、三宮のさらなる発展を予感させる。



BEAMS EYE ON KOBE—ジュームの神戸。(ビームス)

セレクトショップ「ビームス」が、神戸の町を隅々まで見て歩き、厳選した情報をもとに、神戸の魅力を紹介するガイドブック。カテゴリーはファッションから、食、文化、暮らしまで幅広い。

シックな色合の写真に、趣のある文章が添えられ、読んでいて心地よい。巻末の「神戸がもっと好きになる61のキーワード」には、「イノシシ対策」や「港町洋食」などローカルな豆知識がピックアップされている。

古本屋ツアー—イン・京阪神 小山力也(本の雑誌社)

各地の古本屋を訪ねるガイドブック・シリーズの最新作。関東在住の著者が、実際に関西まで足を運び案内する古本屋は、実に二〇〇店余にのぼる。中でも神戸は、昔ながらの店と新しい店が拮抗^{きっこう}している印象とのこと。店の立地や佇まい^{たてまい}、品揃え、価格のみならず、時には店主の風貌まで、余すところなく描かれ、読み物としても楽しめる。巻末には、古本屋マップが掲載されている。

ロープウェイ探訪—昭和の希望を運んだ夢の乗り物! 松本晋一(グラフィック社)

スキートのゴンドラまでを含めた一四五路線を収録し、神戸からは須磨浦、摩耶など四路線が登場。昭和三〇年代に本格普及したロープウェイに漂う昭和レトロ感には惹きつけられる、と著者はいう。空に浮かぶゴンドラの写真には臨場感あふれる解説が添えられ、他に絵はがき、パンフレットなどの画像も充実している。眺めているだけでも旅行気分になれる一冊。

癒やしの丘で—兵庫県立神出学園の不登校支援 ター編・発行

神戸市西区にある兵庫県立神出学園は、日本ではまれな公立のフリースクールで、公立初の宿泊型自立支援施設である。不登校の十代後半から二十代前半の若者たちが在籍する。学校教育法の枠を越え、恵まれた自然環境のもと、共同生活を通じて仲間を作り、地域の人々と交流し、自信と元気を取り戻すことを目的とした場である。開設準備からこれまでの学園の取り組みをまとめた一冊。



ハイカラ神戸幻視行 紀行篇—夢の名残り 西秋生(神戸新聞総合出版センター)

『ハイカラ神戸幻視行 コスモポリタンと美少女の都へ』の続編。神戸の街に往時の摩登ニズムの名残りを求め歩く、神戸新聞連載のエッセイに加筆して刊行。

一宮神社から八宮神社までの道行に垣間見える『星を売る店』(稲垣足穂)の幻想世界、『飾り窓の中の恋人』(横溝正史)の着想源となった元町通のショーウィンドー、写真集『神戸風景』(中山岩太)に写る「カフェパウリスタ」など。

様々な作品から導かれる幻視の情景と現実との交錯の中に、神戸の多様な貌^{かお}が浮かびあがってくる。

播磨国風土記—はりま1300年の源流をたどる 播磨学研究所編（神戸新聞総合出版センター）

「風土記」は奈良時代に地方の状況を中央政府に報告したもので、当時の国情を知るうえで欠かせない資料である。播磨学研究所では『播磨国風土記』完成から一三〇〇年という節目の二〇一五年に、風土記を取りあげた特別講座を開いた。まず、現存する五つの「風土記」について、各地域の研究者によるシンポジウムを開催した。次に研究者により、歴史学・考古学・民俗学など様々な切り口から講義が行われた。本書はその講義録をもとに再構成したものだ。風土記を読み解けば、古代人の暮らしが見えてくるかもしれない。



兵庫県の名字—親から子へ伝えたい我が家のルーツ 森岡浩（神戸新聞総合出版センター）

名字には、地域の歴史がタイムカプセルのように残っている。本書は、「兵庫県の名字の特徴」「名字ランキング1〜350」「兵庫県を代表する名族・名家、珍しい名字」ほか全5章で構成され、姓氏研究家である著者が、名字から兵庫県の歴史を読み解いてゆく。大都市から、日本海側の漁村や瀬戸内海の離島まで幅広い顔を持つ兵庫県には、様々な歴史を背景とした多様な名字が揃っている。

江戸時代の兵庫津—特別展図録

兵庫県立考古博物館編集・発行

古くは大輪田泊おおのたのしほりと呼ばれた兵庫津は、中世から近世にかけて国際貿易港、さらに国内輸送の拠点として発展し、江戸時代には二万人が住む港湾都市となる。特別展では、神戸港の礎となった江戸時代の兵庫津に注目し、『瀬戸内海航路図屏風』、兵庫津最古の絵図『撰州八部郡福原庄兵庫津絵図』などの絵画や古地図、発掘調査の出土品から、町の繁栄ぶりや暮らしが紐解かれる。

==その他の新刊==

MAKEOVER MAGIC MAKEOVER MAGIC

JAPAN著・発行

グレーター—真野の町から—震災21年の報告 和田幹司（友月書房）

メディアコンサルティング）

谷崎潤一郎—その棲み家と女 ほろ

酔い文学談義 たつみ都志（幻冬舎

ひょうたん池物語 久元喜造（神戸新聞総合出版センター）

ひょうたん池物語 久元喜造（神戸新聞総合出版センター）

神戸 その⑨ あんな人こんな人

加納 宗七 かのお・そうしち

文政10年（1827年）～ 明治20年（1887年）

紀州和歌山藩の御用商人の次男として生まれた加納宗七は、幕末の志士活動に加わり、陸奥宗光とも親交がありました。慶応3年（1867）40歳で神戸に移り住み、材木商から回船業・船宿業へと事業を拡大していきます。

神戸開港当時、生田川は居留地の東側、現在のフラワーロードの位置にあり、たびたび氾濫し水害を起こしました。居留地に住む外国人からの陳情により、県は明治4年（1871）、約1キロ東にあたる布引の滝の下から小野浜までを川筋とする生田川の付け替え工事を行います。宗七は川を利用する水車業者との折衝などを行い、工事に貢献しました。その後、旧生田川の土地を落札した宗七は、旧川筋に沿って南北に幅18メートル、これに交わる幅11メートルの道路を東西に5本つくり、神戸の中心となる市街地を造成しました。現在の「加納町」です。

宗七の功績をたたえ、昭和9年に建立された銅像は、戦争末期金属回収で姿を消します。今は二代目の銅像が東遊園地で大工事の跡を見守っています。神戸に住んだのは晩年の約20年間ですが、他にも小野浜に避難港を造るなど、財力と才覚で神戸の都市開発に尽くしました。



加納宗七像（中央区東遊園地）

参考：『草莽の湊神戸に名を刻んだ加納宗七伝』松田裕之（朱鳥社2014）、『ひょうご幕末維新列伝』一坂太郎（神戸新聞総合出版センター2008）

開港当時の日本旅行ガイドブック

今年で神戸は開港一五〇年を迎えます。昨今は外国人の観光ブームで、神戸を訪れる観光客が年々増加しています。今でこそ、神戸を紹介する観光ガイドブックは、数え切れないほどありますが、開港当時、日本を紹介する旅行ガイドブックは、そう多くはありませんでした。

明治十四年（一八八一）、イギリス外交官であったアーネスト・サトウが、『A Handbook for Travelers in Central and Northern Japan』を刊行し、外国人の間で最も信頼できる日本のガイドブックとして、絶賛されました。

この本は、単なるガイドブックではなく、地誌や歴史などさまざまな内容が盛り込まれており、当時の外国人たちの日本学に関する成果を集めたものでした。執筆・編集はアーネスト・サトウですが、その協力者として、『古事記』を翻訳したB・H・チェンバレンや『日本書紀』を翻訳したW・G・アストンな

どの名前があげられています。このアストンは、明治十三年（一八八〇）から明治十六年（一八八三）にかけて兵庫・大阪イギリス領事代理を務めた人です。『英国外交官便覧』にはこの期間、主に長崎の領事を務めたと記載されていますが、当館所蔵の『英国領事より神戸裁判所宛通牒集』、『兵庫縣廳書翰』によると神戸でも勤務していたようです。

右記資料(*)で確認できる
アストンの兵庫・大阪イギリス領事代理勤務期間

1880年2月14日～12月22日
1882年1月19日～5月26日
1882年7月17日～8月7日
1882年10月30日～
1883年2月14日
1883年6月21日～10月5日

このように、実際に神戸で勤務していたアストンという協力者を得て作成されたガイドブックには、神戸並びに近郊についても紹介されています。『A Handbook for Travelers in Central and Northern Japan』の翻訳本である『明治日本旅行案内 下巻 ルート編II』（平凡社 一九九六）に登場するルート35「神戸とその周辺」では、現在の神戸郵船ビルの場所にあった兵庫ホテルから主な観光地までの人力車の料金に始ま

り、取りあげられた地域は、須磨や舞子・明石・有馬などに及びます。また、中には失われてしまった建物などもありますが、今でも神戸の観光地として著名なものも多数含まれています。以下にそのいくつかを紹介いたします。

清盛塚は、一二八六年の年紀をもつ石造十三重塔」と記されています。有馬温泉の紹介では、外国人が使用できる時間が決められていたようです。お土産には当時輸出品として、生産が拡大されていた有馬籠籠工、見所としては、鼓ヶ滝があがっています。その他に、布引の滝や麻耶山天上寺などの記載もみられます。

板宿の「禅昌寺」の紹介で、別名「紅葉寺」と書かれているところを見れば、『摂津名所図会』などが参照されていると思われまます。さらに、諏訪山で明治七年（一八七四）に行われた、金星の運行を観察した内容などにも触れられており、最新の情報も盛り込まれていました。

また、舞子では、「廃れかかった砲台があるが、これは洋式の設計で日本人がつくったものだ」と紹介するなど、実際に現地を訪れたと思われる記述もあります。これは、アー

ネスト・サトウの書簡からも確認できます。この舞子砲台は、二〇〇三年〜二〇〇四年の発掘調査で全容が確認されましたが、保存のため埋め戻されました。現在は、台場の一部と石垣の一部が公園として整備されています。

開港から一五〇年が経った今、古いガイドブックを手に持ちながら、神戸の昔と今を比べる旅にも新たな発見があるかもしれません。



『兵庫港遊歩規定図』明治8年 居留地に住む外国人は、旅行などで自由に行動する区域が制限されていました。貴重資料デジタルアーカイブズより

参考文献
『近代における駐日英国外交官』桑田優
(敏馬書房)
『W・G・アストン―日本と朝鮮を結ぶ学者外交官』楠家重敏(雄松堂)ほか